

日本醫史學雜誌

第 6 卷 第 1 號

昭和 30 年 9 月 1 日 發行

原 著

- 江戸時代のサントニン……………佐藤文比古…(1)
敦煌本食療本草に對する文獻學的研究(2)……………渡邊幸三…(4)
朝鮮疾病史(4)……………三木榮…(22)

報 告

- 第14回國際醫史學大會に列して……………小川鼎三…(12)

史 料

- 緒方洪庵歌集(4)……………(26)

研究餘録

- 日本中世古版醫書年表(2)……………石原明…(3)

雜 報

- 醫學史料展觀 2 つ (22), 總會議事・役員推舉・ソ連醫史學者來朝 (26)

通卷第 1339 號

日 本 醫 史 學 會

東京都板橋區大谷口町724 日大醫學部内山生理

振替口座東京 1 5 2 5 0 番

製品の品質が純粹・安定なため

何時も第一に選ばれる

シオノギのビタミン剤

高單位
綜合ビタミン
ミネラル剤

ポポン-S錠

15錠, 50錠

家庭用
綜合ビタミン

ポポン錠

50錠, 150錠

お子様用
綜合ビタミン

ポポン末

25g, 100g

乳児用
綜合ビタミン

ポポン液

15cc

高單位複合
ビタミン注

シーパラ注

10A, 100A

複合ビタミン錠

強力パテイス錠

20T, 60T, 150T

無痛性
ビタミンB₁注

パテイス注

5mg, 10mg, 20mg

高單位
ビタミンB₁注

ネオパラストリン

50mg, 100mg

ビタミンB₁液

濃厚パテイス液

500cc

無痛性
ビタミンC注

アスコイル

50mg, 100mg

大阪市道修町 塩野義製薬株式会社



SHIONOGI

江戸時代のサントニン

佐藤文比古

サントニンがシナ花の一分分として Kahler 及び Alms に依つて発見されたのは、西紀一八三〇（天保元年）のことである。西紀一八三八年に J. R. Meyer が驅蟲の効が大であることを學位論文としたので、その後凡く使用されるように成つた。

我が國に知られるようになったのは、和蘭人括林の著「藥性新論」(一八五四)及び「和蘭藥局方植物生藥註解」(一八五五)等の書が輸入されたのによる。邦語のものでは蘭醫ポンペ Pompe が來朝して長崎で醫學の教授が行われることになり、直接に口授を受けた司馬凌海が、万延元年(一八六〇)「七新藥說」を著わしたので知られるようになった。本書は入澤北川校で寫本として行われたが、文久二年(一八六二)校者を改めて關寛齋として刊行した。随つて此の二書の本文には多少の増減補正があつて、前者寫本の方がより理論的で後者が一般向のようである。通行本は

後者である。中川淡齋の「西醫日用方」(一八六四)にある珊多尼の條は、本書の藥方の部を轉寫したものである。慶應二年(一八六六)に坪井信良の譯した「新藥百品考」には「撒篤尼一種ノ結晶ナリ攝綿施那中ニ在リ。斯篤里規ニヲ混シ販ク者アリ。詳ニ純品ヲ撰用スヘシ。功能、驅蟲ノ效、攝綿施那ニ同シ。而シテ刺戟スルコトナシ。用法、四歳以内ノ兒ニハ、五六爪、散、丸、又叔箇刺度ニ和用ス、又膏トナス、珊篤尼膏ナリ」又同年刊佐渡三良の「和蘭藥性歌」には「珊多尼サントニウム、即攝綿施那鹽、微味無臭驅蟲神藥」とあつて次第に普遍的となつたことを思わせる。

「七新藥說」の記載は最初の文獻なので要約すると、

a. 藥品名、珊篤尼、驅蟲鹽、神蟲鹽。羅、サントニウム、キニニウム、キニニウムアンチヘルミンチカ (Santoinium, Chininum, Chininumanthemtica)

蘭、サントニン、サントニナ、ウオルムサートスソウト
(Santonine, Santonina, Wormzaadszout.)

獨、サントニン、キニン、ズウイツトルサメンサルツ、

サルスフオンウオルムサメン (Santonin, Chinin, Zitt-
versamensa'z, Slaz v'n wurmsamen.)

法、サルテセメンシナ (Sal de Semence)。

藥品名義、珊東は都耳其及び噫太利で神聖の意。

b. 化學實驗式、炭素、五容、水素、六容、酸素、一容。

サントニンの分子式は $C_{15}H_{18}O_3$ なのでこの式は正しい
ことになる。但し實驗式に相當する語の使用はない。

c. 原植物、生薬名。

アルテシシアコントラ (Artemisi Contra)

アルテシシアフアリア (Artemisia Vahlana)

セメンシネエ (Semen Cinae)

とあつて共に現在と少し異なるようである。

d. 物理的性状

比重、一、二四七 雪白色結晶 水、温湯に不溶、酒精

エーテル 脂油易溶 (以上・・を附した語は刊本にない)。

e. 化學的性質、日光線により黄變、故に瓶を黒紙で被

う。

f. 生理學的性質、微に苦味、香臭無し。小量中量は内
服により變化なし、極大量で悪心、嘔吐、苦悶、疝痛、消
化器を刺戟すること甚だしく血便あり、腹膨衝、眩暈、麻
醉、痙攣、搐掣、瞻妄等の症續き起ると。

等詳細を極め、更に産地及び製法を説いて百耳西亞及び
小亞細亞に生ずる一草樹の小花實を取り、石灰及び酒精を
以て蒸溜するに由て分るとしている。用法としては小兒は
三匁至四匁、中人は六匁、大人は八匁を白糖又は甘朮を配
するとある。又蓖麻油或は阿列布油に和して用うれば良效
ありとし、珊多尼の驅蟲作用は虻蟲に強く作用し其の他は
は弱く條蟲(寸白蟲)に對しては無効であるとしている。
處方として、『珊多尼十二匁、糖一匁、右和勺分ツテ六包
トナシ朝夕各一包を服サシム』とある。

刊本には更に『朋百氏謂ク』として、セメンシ子エを輸
入するより珊多尼の方が有利だ、と説いている。以上が
「七新藥説」サントニンの條の大意である。

なお慶應元年刊緒方郁藏譯の「内外新法」をみるとその
題言に『編中ノ新藥ハ大抵皆予ガ著ス所ノ藥性新論に出ツ
就テ見ルヘシ』とあるので、慶應以前に「藥性新論」が、
譯述されていることになるが今其の年代が判明しない。七

新藥説」と同年代頃にあるのではあるまいか、其の記文は「珊篤涅所謂攝綿鹽、用法一匁、蓖麻子油一匁、卵黄一個調和シテ用ヒ或ハ亞刺比亞護膜ト白糖トヲ和シテ膏ニ造リ每膏四分匁ニ含マシメ用フルモ亦妙」とある。

サントニン使用の記録としては「伊東玄朴傳」文久二年の項「一夕刻御心下御苦悶に付萬一虻蟲も如何と存し、サントニネ十匁、ゴム一分、カンケリ一匁、分九丸とし一日に三包づゝ上る今夕一包」とあるのが始めてのようである。

民間で驅蟲藥をセメンと云うのはセメンシナ鹽の略稱セメン鹽（攝綿鹽、施綿鹽）に起因するものである。

**研究
餘録**

日本中世古版醫書年表（二）

石 原 明

○慶長九年（一六〇四）

- 十四經發揮、一冊、木活字版
- 元・滑伯仁著、三卷、四周双邊、九行十七字、明・嘉靖版繚印、涸轍堂祖博開版、寸法失念
- 同年

- 醫方考、六冊、木活字版
- 明・吳昆著、六卷、明版繚印、醫德堂守三開版、寸法失念、四周双邊、八行十五字
- 慶長十年（一六〇五）
- 玉機微義、八冊、木活字版

- 明・徐用誠著十二行二十字割注、板心魚尾黒口、序跋九行十六字、曲直瀨玄朔校訂、松印軒玄忠開版、五十卷目一卷、明・正統版朝鮮版交合、刊記玄朔板下整版縦七寸五分横五寸九分五厘
- 慶長十二年（一六〇七）
- 難經本義、二冊、木活字版

- 元・滑伯仁著呂復校、二卷、左右双邊有界十行二十一字、縦六寸一分五厘、横四寸九分五厘、曲直瀨玄朔開版
- 慶長十三年（一六〇八）
- 藥性能毒、一冊、木活字版

- 曲直瀨玄朔著、著者開版、單邊有界十四行十二字、縦四寸五分、内眉欄九分横五寸九分
- 同年
- 局方發揮、一冊、木活字版

- 元・朱丹溪著、一卷、藥性能毒と同じ活字使用寸法又同、但し無刊記姑く茲に列す、
- 同年
- 脉語、一冊、木活字版

- 明・吳昆著、二卷、涸轍堂祖博開版、未見恐らく傳本なきか
- 同年
- 新刊黃帝明堂灸經、一冊、木活字版

宋・西方子校、三卷、帶圖印本挿圖整版、坊刻、後印異植版及び慶長十八年異版あり、

○同年

黃帝內經素問註證發微 十二册 木活字版

明・馬玄台著 九卷補一卷、次書と一對、

○慶長十四年（一六〇九）

黃帝內經靈樞註證發微 六册、木活字版

明・馬玄台著、九卷、前書と同版一對、四周双邊、十行二十二

字、縦七寸一分横五寸三分

○慶長十五年（一六一〇）

醫方大成論抄、一册、木活字版

四周双邊無界、十行十八字 縦五寸八分横五寸、以上三部梅壽

軒開版

○同年

本草序例 一册 木活字版

未見、但し、前年八月に梅壽軒開版の本書ありその後印か、十

四年刊本は四周双邊有界九行十九字割注、十七年に同人重刊、

○慶長十六年（一六一一）

素問入式運氣論奧 一册 木活字版

宋・劉溫舒著、三卷、四周双邊、十行十八字、板心魚尾白口、

○慶長十七年（一六一二）

醫方大成論 一册 木活字版

元・孫允賢著、單邊無界、九行十八字、縦七寸横五寸、雲州版

平宣政開版、出雲に於ける最古の明證ある刊本として著聞さ

る。開版者は恐らく領主か、

○慶長十九年（一六一四）

儒醫精要 一册

明・趙繼宗著、紀州版、一卷、寸法失念、和歌山見義堂開版

四周双邊、十行十六字

以上でほと慶長以前の古版醫書を羅列したつもりであるが、な

お「全九集」や噂に聞く慶長勅版「陰虛本病」又は道三の傳蛭峨

本「黃素妙論」など數部を逸している。將來管見に入る毎に補訂

したいと思う、大方の御教示を俟つ次第である。

敦煌本食療本草に對する文獻學的研究（二）

渡邊 幸三

(2) 薬性の書式 敦本は例えば越瓜の條に『越瓜寒』とあるが如くに、薬名の右下に半格大の文字で、温平寒冷の薬性を墨字で注記することが例である。王國維は「食療本草殘卷跋」に、敦煌出土「本草集注序録」龍谷大學圖書館藏。羅氏吉石庵叢書景印の諸風通用薬の陶弘景序に、

『有毒無毒。易知。惟冷熱須明。今以朱點爲熱。墨點爲冷。無點者是平。』

とあるにより、陶弘景の本草經では、薬性を朱墨點で標示したとし、次に食療本草が薬性を文字で注記している所からして、この朱墨點の書式は、唐の時に文字で注記するよりに改められたと述べており、中尾博士もこの説を支持していられる。

しかしこの陶弘景の諸病通用薬序に言う所の朱墨による薬性の標示は、ただ諸病通用薬表内の薬名に朱墨點を附して薬性を標示したことを述べたものである。王國維は之を本條の薬性の標示形式と誤解したが爲に、上記の如き謬説をたてたのである。陶弘景の本草經に於ても、その本條の薬性は文字にて書かれたのである。このことは、西域出上「本草集注」殘卷普魯西學士院藏。黑田源次博士が支那學第七卷第四號、松崎先生還曆祝賀記念文集に夫々紹介されてによつて如實に證明される。従つて食療本草の薬性

の書式は本草經のそれに従つたものである。

(3) 本文の首章の書式 敦本は薬名薬性に連接して「右」の字を冠して本文の首章を記している。但し胡瓜の條の字がない。恐らく誤脱したのである。既に「右」の字を冠しているから、食療本草の原形は、薬名と薬性とで一行を估し、その次行の首に「右」の字を冠して本文が書かれていたことが推定される。

孟詵原有の藥品に於ては、その首章の文は、常識から推して孟詵の文であると思われる。醫心方卷三十胡瓜の條に『胎女子張云』と連引した文に、『孟詵云。寒。不可多食。動寒熱。』とある。この孟詵原有の語は、敦本胡瓜の條の首章の『右今補入す不可多食。動風及寒熱。』と合致しているが如きはその例證であらう。

(4) 「案」の書式 敦本にはしばしば、「案」案經」の文字が用いられ、その上には必ず朱點が附されている。「經」及び朱點の意味は後にゆすり、「案」の意義を前に説明しよう。

「證類本草」に「孟詵云」食療」として殘存する食療本草の遺文には、「謹按」なる語がしばしば見えている。常識上からして、敦本の「案」はこの「謹按」と同一のものである。

ないかと疑われる。敦本吳茱萸の條に、『案經殺鬼毒尤良』とあり、「證類本草」卷十三吳茱萸の條の「嘉祐本草」所引の「孟詵」には、『謹按殺鬼症毒』に作つてゐる。之により「案」と「謹案」とは同一性格のものであることは明白である。

仁和寺等に殘存する「唐新修本草」によると、先ず陶弘景の集注を引き、次に「謹案」の二字を書し、その下に唐本草の注を書くのが例である。「食療本草」が果してこの書式に従つたとすると、「案」「謹案」は張鼎が加えた文字で、それ以下の文一少くともその直下の章は増補の文であることを意味することになる。今この想定を事實に就いて檢すると、敦本胡瓜の條に、

『案。多食。令人虛熱上氣。生百病。消人陰。發瘡及發痲氣及脚氣。損血脈。天行後。不可食。』

とある。又「醫心方」卷三十胡瓜の條に、「孟詵云」と連引した「膳女子張云」の文に、

『發痲氣。生百病。消人陰。發諸瘡疥。發脚氣。天行後。卒不可食之。必再發。』

とある。この文は明らかに張鼎の増補の文であるが、上の敦本の文とその内容に於て、大體に於て一致する。この條

から推して、「案」の直下の少くとも一章は張鼎の文であることが證明される。

更に又、「證類本草」卷二十五青梁米の條の嘉祐本草所引の「孟詵」に、

『青梁米。以純苦酒一斗漬之三日。出。百蒸百暴。好裏藏之。遠行一食。十日不飢。重食四百九十日不飢。：

謹按靈寶五符經中。白鮮米九蒸九暴。作辟穀粮此文用青梁米。未見有別出處。』

とある。中につき「謹按」以上の文は、辟穀粮に青梁米を用いることを述べてゐるに對し、「謹按」以下は、靈寶五符經により、白梁米を用いるものがあることを述べ、上の青梁米を用いることを疑つた記事である。従つて「謹按」の上文と下文とは、明らかに別人の文であつて、上は孟詵の原文、下は張鼎の増補の語である。

以上により、「案」「謹按」は張鼎の語の上に冠せられた文字であることは明らかであるが、然らば、「案」「謹按」以下の全文が張鼎の文であるか、それともその直下の一章だけが張鼎の文であるかが問題となる。中尾博士は敦本吳茱萸の條に

『案經殺鬼毒尤良。又方…、又…、又方食魚骨在腹中痛。』

煮汁一盞。服之。即止。又魚骨刺在肉中不出。及蛇骨者。「及蛇骨」の三字は、或は上の「魚骨」の下に在るへしと思われ、以封其上。骨即爛出。又…

とある。「醫心方」卷二十九治食諸哽方第四十一には、

『臛女子張食經治魚骨在腹中痛方。煮吳茱。服一盞汁。

又方。在肉中不出方。搗吳茱萸。封上。即爛出。』

とある。この「臛女子張食經」の文は、敦本の第四章、第五章に合致しているによつて、「案」「謹按」以下の全文はすべて張鼎の文と見ておられる。

この中尾博士説は、「唐新修本草」では「謹按」から全文の終までが唐本草の注を意味する書式に合致して、一見しては従うべく思われるが、些細に見る時には種々の疑問が生じる。

先ず第一に、中尾博士が張鼎の文にされている「臛女子張食經」が果して張鼎の文と斷じ得るか否かである。醫心方はこの二條の「臛女子張食經」の次に、『孟詵食經云。魚骨哽方。取菽去皮。着鼻中。少時差。』を引用している。一見しては、孟詵、張鼎を連引した文で、「臛女子張食經」

は張鼎自身の言とも思われる。しかし、「張食經」の文は、「食療本草」の吳茱萸の條に在り、「孟詵食經」の文は、「食療

本草」の荻の條に在るものと思われるから、之は孟詵、張鼎を同一條から連引したものでなく、従つて「臛女子張食經」も食療本草の謂に用いられたこともあるからして、張鼎の語と新定することはできない。更に又、後に詳述するが如くに、朱「又方」は、敦本の書式では孟詵の言を示す記號と思われる。この「臛女子張食經」の文は、敦本では「又方」「又」の下に夫々書かれていたからして、之を張鼎の言とする中尾博士説は成立し難くなる。

更に又、中尾博士説の如くに、「案」「謹按」の下がすべて張鼎の言であるとすれば、胡桃、蒲桃、越瓜には、僅かに主效を述べる數語のみが孟詵の文と言うことになり、前後の書例に合しなくなる。

更に又中尾博士説を最も強く否定するに足る資料に、敦本胡桃の記事がある。即ち

『胡桃。平。右不可多食。動痰。○案經除去風。潤脂肉。…又燒至煙盡。研爲泥。和胡粉爲膏。拔去白髮傳之。即黑毛髮生。又…又方…又方…○案經動風益氣。發固疾、多喫不宜。』

とある。中につき、上の「案」の下にある。「又燒至煙盡…」の一章は、「醫心方」卷四治白髮令黑方第四所引の『孟詵

「食經治白髮方」の文と合致する。しかしこの「孟誦食經」の文は、必ず孟誦の言と断定することができないからしばらく問題外とするが、この胡桃には、前と後とに二つの「案」の文字がある。しかもその中の一つの「案」が誤衍であるとは思えない。この事實から推すと、「案」はそれ以下の全文を支配すると言う中尾博士説は明らかに成立しないことになる。

以上を総合すると、「案」「謹按」は共にその直下の章が張鼎の文であることは疑を容れないが、この「案」「謹按」がその下の全文を支配するものではない。然らば何れが孟誦の語であり、何れが張鼎の語であるかと言う問題に關しては、この「案」なる書式からは決定することができない。むしろ下に詳述する朱點、「又」「又方」なる書式に譲るべきであろう。

下に詳述するが如くに、朱點を章首に附した章は張鼎の増補の文であり、「又」「又方」を章首に冠した文は、孟誦の文である。この立場から、敦本を通覽すると、各條につき、張鼎が加えた一番はじめの章首に「案」が冠せられている。但し蒲桃の條には「○調中○案經」とあるが、上の「○」は誤衍であろう。之によつて、張鼎は自己の増補した首章に特に「案」の字を冠え、他はただ朱

點をその章首に附しただけであると解釋される。ただ胡桃の條に二つの「案經」があることから推すと、張鼎が「經」を引用する時には、やはり「案」の字をその上に冠したのである。又鷄頭子、芟實、羊梅の三條には朱點を附した張鼎の文がありながらも「案」の字はない。敦本は相當亂雑な抄本と思われるから、衍點が誤朱した爲か、「案」が誤脱した爲かのいづれかであろう。

又中尾博士は、「醫心方」では「臍女子張」として引用していること、及び「證類本草」の「食療本草」の遺物に「謹按」とあることから推して、「食療本草」の原本では、「臍女子張鼎謹按」に作つていたと想定されている。しかし前述したが如くに、「新修本草」はただ「謹按」を冠して陶弘景の注と區別していること、又「食療本草」は私撰であることより推して、「食療本草」の原本は、敦本と同じくただ「案」とだけ言つたのではなからうか。「醫心方」が之を徵引するに際し、ただ「案」とだけでは何人かが不明であるからして、その著者名の題署に従つて、「臍女子張」を補つたものと推定される。後宋に入つて、本草經の注の書式にならつて、「案」を「謹按」にしたものであろう。

(5) 「案經」の一經」の意義 敦本では、「案經」と言

うものが殆んどであつて、胡瓜、越瓜のみに「案」と言つてゐるに過ぎない。

中尾博士は前に引用した青梁米の「嘉祐本草」所引の孟詵の文に、「謹按靈寶五符經」なる文があることからして、「案經」の「經」はこの「靈寶五符經」を指すのではないかと疑つておられる。しかし青梁米の孟詵の文を案するに、孟詵が青梁米を用いて辟穀糧とすると言ふ説を疑ひ、「靈寶五符經」では白鮮米を用いておることを述べて、この「靈寶五符經」を引用したまでで、之を「案經」の「經」にあることは許されない。又中尾博士説の如くであつたならば、何故に青梁米の條のみに、「靈寶五符經」なる全名を擧げたかを説明できない。したがつて中尾博士説は成立しないことになる。

上記のように、「案」の直下の一章は張鼎の文であるからこの「經」は張鼎が孟詵の語を増補する爲に引用したものである。「經」の下の文は食療關係の文であり、且つ「經」として引用している以上、その書名に、「經」の字のつく食療關係の書であることが想像される。唐の本草界に最も權威のあつたのは、「新修本草」であるからして、「案經」は「新修本草」を指すかと疑われるが、「案經」の下の文は「新

修本草」に合致しない。又「醫心方」にはしばしば「孟詵食經」を引用しているが、この「孟詵食經」は、その文を敦本に對校すると、「食療本草」の謂であつて、醫心方卷四治白髮令黑方第四の孟詵食經治白髮方の文と、敦本胡桃の條の文と對比すれば容易に知り得る。孟詵に別に「食經」なる書があつた譯ではない。「食療本草殘卷」の唐蘭跋には、

「按語每引經。未知何經。倭名類聚抄所引。有食療經。或卽其書。故名曰食療本草歟。」

と言つてゐる。「和名類聚抄」にはその卷二陰核、近目、失聲等の條に、食療經を引用しているにより、且つその書名が食療本草と有機的關係が考えられるによつて、「經」を食療經と疑つたのである。この説は誠に理由のあるものであるが、「和名類聚抄」に引用される遺文を、敦本、「證類本草」等に引用される「食療本草」に對校したが、合致するものが見出されず、従つてこの「經」が食療經である積極的な證據はない。新舊兩唐志によると、「崔氏食經」、「馬琬食經」等の如く、「經」を書名とする食療關係の書は少くない。従つて、「經」は具體的に如何なる書なるかを決定することはできない。ただ張鼎のころ行われた「經」を書名とする食療關係の書であることだけは言い得るであらう。

(6) 朱點、又筆、又方筆の書式、敦本には朱點及び朱筆の「又」「又方」なる記號・文字が所々に入りまじつて存在している。此等は、何か特殊の意味を表す書式ではないかと思われる。中尾博士は此等を單なる句點、檢索に便にする爲の朱筆と解された爲か、殆んど言及されていない。敦本のもつ最も重要な文獻價值を看過されたと思われ、惜しい次第である。

由來本草醫書には、各章の章首に朱點を附す例は多い。

例えば敦煌出土本草集注序録の如きである。その多くは書寫の時、章首に朱點を附して行かえを示し、用紙の節約を計つたものである。しかるに敦本では、前に例示した冬瓜

の文でも知られるが如くに、各章首に朱點が附された譯ではなく、敦本全章一百八章の中、二十四章の章首に朱點があり、朱點のある章、無い章が入りまじつてゐる。従つて敦本の朱點は單なる「行かえ」や句讀點ではなく、他の文獻的意義のある書式であろう。次に朱書の「又」「又方」はその上の一格を空けて書かれ、その上に朱點を附したものは一例もない。敦本には、朱書の「又」が四十一、「又方」が十二もある。次に理解を助ける爲に、敦本の胡瓜の條を例示する。

字傍の―は朱筆。○は朱點を表わす。

「胡瓜。寒。不可多食。動風及寒熱。又發店癩兼積瘀血。○案。多食。令人虛熱、上氣。生百病。消人陰、發瘡及發痰氣及脚氣。損血脈。天行後。不可食。○小兒食。發痢滑中。生甘蟲。又不可和酪食之。必再發。又搗根傳胡刺毒腫甚良。」

この一條と前に例示した冬瓜の條を併せ見られたら、朱點「又」「又方」の用例を知り得られるであろう。

先ず朱點に就いて見ると、章首、「又」「又方」を冠する各章を除くすべての章首に朱點が附されている。「蕪」の條「子食之」の章首のみに、朱點がない。この朱點は何を意味するか。恐らく誤脱したものである。

上に詳述したが如くに、「案」の直下の一章は必ず張鼎の文であるが、この「案」の上方には、必ず朱點が附されている。又各條の首章は例外なく孟詵の原文であるが、此等には全く朱點が附されていない。此の事實から推すと、朱點を附した章はいずれも張鼎の増補の文であり、朱點のない首章、朱書の「又」「又方」を冠する各章は皆孟詵の原文ではなからうかと推定される。

今「醫心方」に就いて見ると、卷三十胡瓜に

「孟詵云。寒。不可多食。動寒熱。發瘡病。膳女子張云。

發瘰氣。生百病。消人陰。發諸瘡疥。發脚氣。天行後。卒不可食之。必再發。」

とある。之を上に例示した敦本の胡瓜の條と對校すると、『寒不可多食。動寒熱』なる孟詵の原文は、敦本の首章に合し、「發瘰病」なる孟詵の原文は、敦本の第二章「又發店瘰。兼積瘀血。」店は久瘰の謂を省略摘録したものであり、「腊女子張云」以下の張鼎の増補の文は、敦本の第三章「○案多食…」の文と合致している。之により大體上の想定が正しいことを裏付けられよう。醫心方には、孟、張を連引する文で、しかも敦本と合致する條はこの胡瓜の一條だけである。

更に考えると、本草經では本經の記文を朱書し、別録の記文を墨書する朱墨雜書の書式を用いている。張鼎もこの書式にならぬ。朱書すべき孟詵の原文には、「又」「又方」の字を朱書してその章首に冠して孟詵の原文であることを表し、又朱書すべき張鼎の増補の文には朱點を章首に附して張鼎の文であることを表したものとされる。

以上により、敦本の朱點は張鼎の文、朱點のないものは孟詵の原文を示す書式で、「又」「又方」を朱書するのは、本經の記文を朱書した書式の遺風であろう。

次に、「又」「又方」の用法に就いて考えるに、「又」は主

治を重ねる時に、「又方」は處方を重ねる時に用いられるのが例であるが、敦本にはその例外も少くはない。恐らく傳寫の間に混亂したものであろう。更に又、隋唐間の醫書本草には、「又」「又方」を用いるのが一般的な風尚であつたから、この「又」「又方」は孟詵の原有の文であつた。張鼎が増補する時に、本草經の朱墨雜書の例にならつて、「又」「又方」の字を朱書に改めたものと思われる。

以上の想定が若し正しければ、證類本草に残存する「孟詵」「食療」等の食療本草中の「又」「又云」の直下の一章は孟詵の原文であり、「謹按」直下の一章は張鼎の文であることが知られ、従つて食療本草複原への一大手がかりを得たことになる。
(昭和二九・八・九・稿了)

和漢古典籍

皇漢醫藥書在庫多量

和漢洋古書目錄發行

(乞御照會)

中尾松泉堂

大阪市東區淡路町四丁目三
電話北濱(23)八七九七番
振替大阪一八四八三番

第十四回國際醫史學大會に列して

小 川 鼎 三

昭和二十九年九月十三日から二十日までイタリアのローマおよびサレルノで開かれた第十四回國際醫史學大會に日本醫史學會の代表として出席できたことは私の大きい喜びであつた。この好機は私が日本學術會議の命により英京ロンドンで開かれた國際解剖學用語委員會に日本代表として出席した旅行の歸途にとらえたものである。

九月三日に私はスイスのチューリツヒからまずジュネーヴに飛び、こゝでイタリアの飛行機に乗りかえて、フランスのニースを経て日没後ローマに到着した。ニースからローマまでは大部分地中海の上をとぶが、途中でコルシカ島の北端をかすめて、ついでエルバ島を左にみるコースであつた。つまり蓋世の英傑ナポレオンの跡を空から葬つたわけである。弦月が中空にかゝるその邊りの眺めはよかつた。

九月六日の朝、ローマ大學醫史學教室をたすねて主任の

パッチニ教授に会いあいさつをした。この教室はローマ大學の正門を入つてすぐ左手の建物のなかにある。地下室でパッチニ氏他、數人の人々が大會の準備で忙しく働いていた。パッチニ氏は英語もドイツ語もしやべらず、女の助手が通譯をした。會費八千リラを拂つた。この大會にきた外國人では私が一番乗りであるという。また開會まで一週間あるのだから當然である。演説の順序を印刷したものをもらつたが、一般講演のA部門のトップがOGAWA(Tokyo)となつている。優遇か冷遇か、このときは不明であつたが、後に感じたところでは前者の方が真相らしい。

私は去る三月に東京からこの醫史學大會にあてて未確定ながら出席希望の通知と演題および抄録を送つたのであつた。そして歐洲の諸地をまわる間に旅費の減りぐあいからして出席可能のみこみがついたとき、パリから手紙をイタリア大使原田氏にあてて出してパッチニ教授に連絡しても

らつて、大使館の金倉書記官からその連絡がついた旨の返事をもらつていた。だからこの日も私が醫史學教室に入つてゆくと君がオガワ教授かというぐあい、大變きもちがよかつた。たゞ英語が女の助手しか通じないもようであることと私の演題の中にミスプリントがあつて *Chyle* が *Chycle* となつてゐるのが氣になつた。こういう英語も知らないのかと不思議におもつた。これはたゞのミスプリントでなくあとでもらつた抄録集のいたる所でこの語がでるところではまちがえていた。私は國際會議という以上、それがイタリヤであつても、英語がもつと通じるものこの時まで考えていた。

それから私はローマの宿(Piazza San Ignazio)の *Pensione Monini* で演説の原稿をつくつた。江戸時代における解剖學の發達を乳糜管實視の問題を中心にして述べようと豫め腹案はきめてあつた。そのため寛政十二年の大矢尙齊の解剖圖と池田冬藏の解臟圖賦一冊はいつもトランクの隅に入れておいて、それまでに二度、ロンドンで一度とフランクフルトで一度だして人に見せて説明したことがあつた。大會がはじまる十三日までにまだ時日が若干あるので、それを利用して九月八日の早朝ローマを發つて、まずバス

で、オルヴィエト、アクアペンデンテ、シエナを経て、フイレンツェにいつた。十六年前曾遊の地である。三日間の滞在ではとうていフイレンツェの空氣を滿喫とまではいかないが、いくらか満足できる程度にみて歩き、それから汽車でボロニヤ、パドアをおとすれた。何れも古い大學の所在地で、解剖學勃興の土地であり、前回は汽車で通過したのみであつたから、こんどはもつとゆつくり見たいとおもつたが、醫史學會の開會式が明日にせまつた十二日の午後急いでパドアからローマにもどつた。

九月十三日、開會式がカピトルで行われた。宿から近いのでヴェネチア廣場をこえて歩いていく。會場の入口に立て看板などの類が一つもないので、日本の學會とすいぶんちがつた感じがする。

十時十五分に式が初まつた。文部大臣、ローマ市長、會長パッチニ教授などの演説があるが、イタリヤ語であり、その要旨をフランス語で通譯するので、さつぱり分らない。イーヤホーンで各國語をきかせるのかと思つていたので、少々豫想はずれである。その他、會員への注意など紙に書いて張りつけたり、黒板に書いたり決してせず、たゞ伊佛語で大聲で知らせるだけなので、どうしていゝのかよくわ

からず、隣りの席に坐つていたスカーピン氏（イタリアの
 歴史學研究者）が英語を話すのを幸い、その助けで大體の
 ことがわかつた。

二カ月前ドイツで會つてお世話になつたフランクフルト
 大學の歴史學教授アルベルト博士夫妻に開會式が終つたと
 きであり、久澗をのべて、この學會のあいだいつも親しく
 した。

十一時に開會式がすんでから一同バスに分乘して Valli-
 celliana 圖書館にいく。ここで古い醫書が展覽されてい
 る。アヴィセンナ、モルガンニなどのものがある。手稿本
 が多いので甚だ貴重なものであらうと感じた。

この日の午後はランシジ Giovanni Maria Lancisi（一
 六五四ローマで生れ、一七二〇ローマで歿）とグラツシイ
 Battista Grassi（一八五四—一九二五）の前者は三〇〇年
 祭、後者は一〇〇年祭がおこなわれた。ランシジは解剖學
 者として著名であり、一三八年間埋れていたエウスタキオ
 の解剖圖を公刊した人であり、グラツシイは寄生蟲學で大
 きい功績をたてた人で、マラリヤがアノフェレスで媒介さ
 れることを發見した一人とされている。ローマ大學の解剖
 學教室の表てにグラツシイの名前が刻まれているのをみる

と、解剖學にも功績のあつた人であらう。

この兩人の記念祭にはぜひ出席しようと考えていたが、
 その機を逸したというのは、私事ながら若い外交官である
 私の女婦がこの日の朝エアフランスで日本よりローマに
 到着して、私どもの開會式がすむのをローマの日本大使館
 で待つていたためである。彼は明朝マドリッドに發つので
 ある。私は古い醫書展覽の圖書館からタクシーをひろつて
 大使館にかけつけて、久しぶりに會い、東京の話をきくこ
 とに有頂天になつてしまつた。彼の泊つている豪華なホテ
 ルパラスにも行き、私の安つばい下宿屋にも案内して、彼
 が日本からのおみやげとして持參の焼のりやのしいかを食
 べて思はず時をすごしてしまい、その記念祭に行く時間が
 なくなつてしまつた。彼が一昨日、羽田を發つ直前に書い
 たという私の家族一同の手紙をよむのもうれしいことであ
 つた。四カ月に垂んとする歐洲の旅行で家庭的な氣分に飢
 えていたのである。

九月十四日、ピアツツアコロンナからD線のバスでロー
 マ大學にゆき、受付で學會用の書類をどつきりもらう。會
 場に入ると總會講演らしいものをやつてゐるが、依然イタ
 リヤ語とフランス語が横行して、英、獨語はこゝでは微力

であることを感ずる。廊下でシカゴの Veit 女史に會い、向うから先きに名乗られて、緒方教授を熟知しているとのことで、うれしくなる。またザルツブルグの近くに住むという Edwin 氏は片言の日本語で挨拶して私をまずおどろかした。どうして君は日本語を勉強したのかとたずねると前には日本人から習ったが、近ごろは適当な先生がみつからぬので、朝鮮の人から習っているという。

午後はまず米國のフルトン教授がブリーストリーの生涯と業績について一時間の特別講演らしいのをやる。これは英語だからかなり分る。それがすむとABCの三部に分れて、私がA部門の第一席であり、少しく緊張して登壇する。一人二〇分づつの演説である。座長はイスラエル大學のライボーウィツ教授。

私は開口一番、「余は日本醫史學會を代表してこの會に出席しているのであるからわれわれの會長および全會員よりのご挨拶を皆さんに申し上げる」と前おきした。このとき一齊に拍手がおきた。「日本醫史學會は一九一五年富士川游によつて創立されたので今日までに殆んど四〇年を閲している。現在二つの機關誌を有している。一つは東京で發行される日本醫史學雜誌、いま一つは大阪で發行される醫

譚である」と述べて、こゝで日本から持參の二種の雜誌を聴衆に示した。

それからあとは山脇東洋の藏志、杉田玄白らの解體新書を説き、これが日本の解剖學に大きい影響をおこしたことを乳糜管の實視を中心にして述べた。三浦梅園、麻田剛立、大矢孝靖、藤林普山、小森玄良らの努力のあとを紹介して最後に池田冬藏の解臟圖賦の一八四九年版にみられる小森義眞の功績について述べた。義眞はその解屍のとき（一八二一）は十八歳の若さであり、その後三年で夭折したと結んだ。時間もちやうど二〇分ですんだ。

このときフルトン教授が發言のため立ち上つた。きき損つたらいけないと思つて、注意してきいていると、かゝる問題は生理學者にも甚だ興味があること、スエーデンでルードベツクが乳糜管を發見したときのことを追加し、終りに義眞は何歳であつたかと質問したので、私は壇上から十八歳と答えて、ご意見に感謝する旨をのべて壇を下りて最前列に着席していたフルトン教授と握手した。そのとき私は小さい聲で昔エール大學でドツサー・ド・バレン先生のところまで神経生理學を勉強しましたとさゝやいた。フルトン教授はあの時はすぐ私どもの研究室の階上で Primate

Physiology の主任をしていたので、あのオガワかと思ひ出したそうで、あとで私の席のそばに来て少し會話をしたのであつた。

私が演説をすまして自席にもどつたら、例のエドウィン氏がやつてきて「ウツクシイデシタ」と日本語で云つた。

私は何のことか分らず、たゞ「アリガトウ」と述べておいたが、その後他の人が演説が beautiful であつたといふのをきいて、はゝあ人の演説を賞めるのにさういふ形容詞を使うのかとさつた。演説の方は割合うまくいつたが、デモンストラチオンは不成功であつた。こゝには展覽場などは全くない。だから私は大矢孝靖の解剖圖や池田冬藏の本を演壇のすみで邪魔にならないような所においてきたが、あとでそれを觀る人は少なかつた。後に會場がサレルノにうつつていたときに英國の學者（リバプールの内科教授チエンバレン氏）が私に解剖圖をみせてくれと云つたが、このとき私は不用意にも解剖圖をローマの宿においてあつたので、その希望を容れることができなかった。

歴史的な文書や圖の展覽というようなのは第一日目にみた圖書館以外、會場では何も無い。この大會に附屬して醫學にちなんだ郵便切手の展覽會が會場の近くで開かれて

いたくらいが關の山である。その夜は會員の中の有志がバスに分乘してローマの夜を見物することであつたが、その出發が十時とこのことで私は敬遠した。

それからあと一日半は比較的平凡のうちにすんだが、十六日の午後はまだ役員會があり、私は役員でないが日本代表という資格で、特に出席を求められた。次回の開催地をきめるのが主な仕事であつた。二年後すなわち一九五六年にはロンドンとエジンバラで開かれる。第十三回は一九五二年九月七日から十五日までニース、カンヌ、モナコが會場になつて開かれたとこのことで、そのときの發表を網羅した出版物をみせられた。(※一)

この午後、二時間ばかりB部門の座長をやる。スエズ以东たゞ一人の出席者であり、日本代表というわけで花を有たせようというのである。英獨の演説はやつと分るが、伊佛のが多いので内容が見當つかず、英語の抄録集を壇上で読んでいるといふあわれな状態である。會の進行については大よそ英語でやると、通譯がそれをフランス語、イタリア語にすぐ譯してくれる。發言者を指名するときは手あげている人の名前が分らぬので、こちらは Monsieur 1 とよんで發言を許すのである。ライボーウイツやフルトン

が座長をしていたときは各演説に對して寸評をフランス語で與えていたが、私にはそんな離れ業はできない。それをやらない座長もあることは見極めておいたから安心である。

七時半になつて座長としてちよつと變つた經驗をした。

C部門で映畫をやるから各部とも七時半で今日の演説うち切りの知らせがきたので、私は最後の Gallassi 氏の分は明日に廻して今日はこれで閉會とやつた。人々はみな講堂からでていつた。私は重荷をやつと下ろした氣持で通譯と話していたら、Gallassi 氏を先頭にして、廊下から十人ばかりどやどや入つてきた。そして「座長！ 映畫はまだやつていないから演説をつづけよう」と叫ぶのであつた。そこで通譯の女に映畫がまだ始らぬことを確かめさせた上で“ We will continue the session ” と宣言して最後の一席までやつとすませた。そのとき聴衆を數えてみたら僅か十二人であつたが、曲りなりにも座長をつとめ上げたのである。

その夜は十時からボルゲーゼ美術館でレセプションが開かれた。入口ではブレイメンの眼科醫と名乗る丈の高いドイツ人と多く話をし、館の内部ではスエーデンの教授夫人

たちと會話し、チチアン、クラナツハなどの名作をみてまわる。最後にエドウィン氏から日本の江戸時代はなぜ人口が殖えなかつたかと質問されて、間引きのことなど話したが、だいたい苦しかつた。なおその前日の夜はやはり十時からサンアロジエロ城内で音楽會があつて、獨唱とピアノをきいた。會員のほとんど全部がきてゐるのに驚いた。

九月十七日、朝食まえに一と仕事する。それはこの學會に出席しているキューバの學者の強い依頼によるのであつて、フィンレイ C. J. Finlay が一八八一年に初めて黃熱の傳播が蚊によつておこることを發見し、しかも何百種の蚊の中からエーデスエジプティがその責任者であることを指摘した大きい功績が今日までの醫學史では充分に顧みられていないから、この國際醫史學會を機會に全世界に顯揚したい。そこで私にこの企てに賛成する書類を日本文と歐文併記で作つてくれというのである。その文章を寫眞版にするとのこと。

その話を一昨日うけたとき、少々困つたなと思つた。日本の細菌學者に問い合せるひまはなし、仕方がないから自分の良心にとがめない範圍で書こうと考えて承諾した。この朝書いたのがその原稿であつた。日本文の書き出しは

「余は細菌學の専門家でないが、フィンレイの業績に關してキューバの科學者や歴史家が永い間調べて得た結論は正當であると信ずる」というぐあいにして、日本文を横書きにして、その下に英譯をつけた。(※二)

朝食のあとで、いつものようにバスに乗つてローマ大學内の會場に行つた。會場にはタイプを打つための部屋が特別に設けてあるので、そこで今朝作つた草稿から清書をした。署名をした上で折よく廊下で會つたキューバの學者にそれを渡した。キューバからは三人きていたが、皆がその書類をみて満足したのか改めて感謝の握手を求めてきた。

この日の午後、われわれ一同が法王に謁見することになつてゐた。三時半にエセドラ廣場に集つて、大型のバス四臺に分乗してガルドルフオに向つた。こゝはローマの東方、バスで約一時間の行程で、小高い山の上にあつて、すぐそばに風光のすぐれた火口湖がある。こゝに法王の夏の離宮がある。

私も宮殿内の廣い一室に集つて、正面の座に法王が出てくるのを待つてゐた。私は前から數えて十列目ぐらゐに坐つていたら、會長のパッチニ教授が大聲で私の名前をよんで最前列に出るよゝうにといふので席を變えた。法王ピオ

十二世がドーアの所に現われると一同左の膝を床につけてお辭儀をした。私は最前列のため勝手が分らず少しおくれに隣りの人のまねをした。法王は正面の座について非常にきれいなフランス語でかなり長い挨拶を云われた。それから法王は段を下りて私どもの方へ近づいてきた。最前列の中央にいた會長が握手した。もしも法王が私の前にきたら握手をしなければならぬ。少し緊張してそのやり方を横目で偵察すると、片膝をついて法王の手に接吻している様子であつた。

今まで靜肅そのものであつた會衆のあいだに動搖がおきて、列がやゝ亂れて、私の前にも他の人がきて立つた。彼らは法王と握手したい氣持で一杯なのである。異教徒である私には好奇心の問題だけなので、席をゆすることは少しも残念でなかつた。謁見が終つて私どもは法王から記念のメダルを一個づつもらひ、ガンドルフオ離宮を辭去した。再びバスに乗つてローマを指して夕暮れの新アピアン道路を急いだ。道の兩側に大昔の遺跡アクエドクトがみえた。

その夕方、會員の一部主な人々がユーゴスラヴィアの大使の招待をうけていた。私どもバスからタクシーに乗り

かえてそこに馳けつけた。大使館ではコックテールパーティーがすでに始まつていた。私の坐つたテーブルには四人のロシアの學者が集つていた。私の隣りにいたテルノブスキー教授はモスクワ大學の解剖學主任で、腦が専門とのことで、私も東京大學で似た位地にあり、専門も同じというわけで、特に親しく話をした。こゝには鐵のカーテンなど微塵もなかつた。彼は兩手で私を抱くような恰好で握手をした。(※三)

しかしこゝで會つたロシアの教授たちはみな英語もドイツ語も得意でないらしく、私との會話は直接でなく、ユーゴスラヴィアの學者がそばにいて、この人と私がドイツ語で話し、彼らとはロシア語とおぼしい言葉で通譯した。彼らは法王との謁見には行かなかつた。私は行つてきたと云つたら、ほうつというような發音をして肩をすばめた。テルノブスキー教授は一八八八年生れとのことでもかなりの年配であつて、東大の井上通夫先生が以前カザン大學を訪れたとき會つたと云つた。私はその井上先生の後任であると話したが、それが先方まで通じたかどうか確かでない。

九月十八日から二十日までの三日間はサレルノで學會が行われたので、十八日の早朝ローマの終着驛から特別した

ての列車で會員一同そろつてサレルノに向つた。ナポリまでは汽車が速いが、それからは各驛に停車してゆるゆるすゝむ。しかしヴェスヴィアスを左にみて、右は紺青の海で景色がよい。四時間あまりかゝつて正午近くサレルノについた。サレルノは醫史學では最も有名な土地であるが、古い醫學校のあとは何も残つていず、今は觀光地として知られ、温泉のない熱海というあんばい。もつともそれよりは全體の空氣が上品であるが、山のたゞすまいは熱海の方がよい。車中で廊下に立ちながらボルチモアのシユライオック教授と話した。いま米國の醫史學界をリードしている人である。

その午後、市役所内のりつばな講堂で開會の儀式があつて、一般講演にうつる。こゝでの演説はサレルノ以前、およびサレルノ時代のことが主になつてゐる。デアアナホテルに泊つていて、その食堂で夕方たべているとアリカンドリというイタリアの耳鼻科の醫者 (Sulmona 在住) がやつてきて親しくする。もつとも彼はイタリア語しかしやべらぬのでお互いに四苦八苦の會話である。食事がすんだとき彼はチイルコに行こうという。何かとおもつてついで行つたらサーカズであつた。

十九日は朝、会場までの途中、フランスのシモン氏と話しながら歩いて、ヘブライ醫學やレイネル・ラバスチーヌについての彼の論文をもらつた。レイネル・ラバスチーヌは最近歿した、この國際醫史學會の會長である。神經學者としても著名であつた。

午後はバスに分乗してギリシヤ時代の遺跡ペストムに行つた。約一時間の行程である。途中で英米軍上陸の地をとつた。隣りに坐つていたベルギーの Boeynaens 氏とパルヘインのことを話し、パルヘイン解剖書の日本譯の寫眞を送ることを約束した。彼はボゲールの下で勉強したという。いまは結核専門醫であるらしい。夜はデアアナホテルの食堂で公式會食があつた。私はエドウインの案内でドイツ人のグループに入つた。大きい日の丸が会場にあげられてゐるのもうれしかつた。

九月二十日は學會の最終日である。午前中の講演ではボン大學のストイデル教授の解剖學用語の由來に關するものがおもしろかつた。ロシアのテルノブスキー教授はよい記念のために (Bon souvenir) とつて市役所のヴェランダに立つ私を撮影した。午後はまたバスで會員みな Cava di Tirreni の僧院をみに行つた。

夕方、市役所で閉會式があつた。これにも出席してゐたら、各國代表の挨拶というのをはじめ、全く不用意のまま、Japoni Professeur Ogawa」と指名されてしまつた。このときほど臆を冷したことはなかつた。やむをえず出ていつて英語で挨拶の言葉をのべた。「日本醫史學會はいままで國際醫史學會から孤立したかたちであつたが、今後はその結合を密にしたい。日本の醫學の歴史について何かしらべる必要のあるときは遠慮なく私どもの方に云つてほしい。日本醫史學會の會員はできるだけ努力してお答えする」という意味のことを述べてひつこんだ。すぐその要旨がフランス語で會衆に傳えられた。日本と歐洲のコンネクションを述べたのは適切であつたとあとで賞めてくれた人もあつたが、ある人はもう少しジエスチエアを加えるべきだつたと評した。私に云わすれば絶體絶命の努力で英語をひねりだしてゐるのだから、それに馴れないジエスチエアをしたら、言葉の方がでなくなる。

式のあとでコックテールパーティがあつてそれで散會した。

この大會の會長ローマ大學醫史學教授のパッチニ Adalberto Pazzini 博士、總務幹事ガレazzi M. Galeazzi

博士に大いに感謝する次第である。Palcinelli 氏や女の秘

書にも大變お世話になつた。名簿により參會者數をみると

イタリヤ……………	六五	ドイツ……………	二九
フランス……………	二七	イギリス……………	七
米國……………	三〇	スエーデン……………	一六
ブラジル……………	五	ベルギー……………	六
アルジエンチン……………	五	オランダ……………	六
アイルランド……………	三	グアテマラ……………	三
イスラエル……………	三	スペイン……………	六
キューバ……………	三	ユーゴスラビア……………	八
スイス……………	五	ロシヤ……………	四
ヴェネズエラ……………	三	トルコ……………	四
その他二名づつはウルガイ、ハンガリー、ポルトガル、			
一名づつがアルジェリ、濠洲、オーストリア、ポリビア、			
カナダ、チエコスロヴァキア、デンマーク、エジプト、日			
本、リバノン、メキシコ、サンマリノであつて、總計二五			
六人、それに夫人同伴の學者が多いし、地元の人々は名簿			
以外でも參會しているの、なかなか賑かなものであつ			
た。演題の數は二一三に及んだ。			

* * *

以上は本年の四月初めに京都で開かれた日本醫學會第一分科會
で私が演説した國際醫史學會みやげ話の内容を大體そのまま書い
たものです。ところがその後になお判明したことがあります。

(※一) 九月十六日午後の役員會で新しい常任委員 *Comitepe-
rmanent* が四名、満場一致で定められたなかに、私じしんが三
番目にならべられた名前が入つていたことを、後日送つてきた書
類で初めて知つたのは全く恥かしい次第です。歴史はすべてまち
がつてはいけませんので、告白いたします。あのときフランス語で
議事が進められていて、私は注意してきいていたつもりでした
が、席が後ろの方であつたので、よくききとれなかつた。それで
も一番目のアバスカル氏(ハバナ)と、二番目のアルテルト氏(ド
イツ)はたしかに分つたが、そのあとが私(日本)と、オメアラ氏
(アイルランド)であつたとは知らなかつた。自分の名をよばれて
氣がつかかなかつたとは驚いたことですが、オガワでなく、Teizo
のほうを妙な發音で云われたためであるまいかと思つています。
すぐそばに黒板があつたのですが、それに四人の名前を書いたり
せず、議事がすべて口頭のみであります。

(※二) フィンレイの功績を顯揚する私の書きものは約束どお
り寫眞版で *Cadernos de Historia Sanitaria. La Habana,*
1953 にすでに發表された。

(※三) この四人のロシヤの學者の一人であるベドロフ教授
(モスクワの醫史學研究所長)とは今夏の八月某日、東京のプリ
ンホテルで再び會つて話すことができた。

雜報 1

醫學史料展觀二つ

今春四月、京都で行われた第十四回日本醫學會總會の行事の一部として、醫學史料の展觀が二個所で行われた。後述の如く何れも空前の試みで、醫史學への興味を一般の人々に與えた影響は大きなものがあると思ふ。京都國立博物館で開かれた「醫學に關する美術資料展」は、博物館の性質上最もその機能を發揮した展觀で門外不出の祕寶で初公開のものも少くなかつたことは、識者の賞讃の的であつた。

醫學に關する美術資料展

三月二十九日より四月十日まで京都國立博物館で開かれたこの展觀は「病の草子」斷簡の原本三面が初公開され會場の人氣をさつた。同時に諸家に散在する異本を含めて「病の草子」の現存全部が一堂に集つたのは空前のことである。醫家肖像の部では幕末の初期洋畫が興味深く典籍の部では中國關係二十五部、日本のもの約四十點のうち唐寫本「本草集注序錄」、仁和寺藏「醫心方」、道三自筆「啓迪集」など國寶、重文級の原本が出陳初見の史料が多く、昨年新發見の清涼寺釋迦の五藏が特別に展觀されたことは大きな喜びであつた。

富士川本の展觀

京都國立博物館とは別に、京都大學附屬圖書館では富士川本約五十點を展觀した。富士川文庫のうち代表的文獻を選び、解説を附してあつた。これは醫史學に全く關係のない京大の司書の方々のお骨折で解説目錄もほど簡明に正しく出來ていたのには深い敬意を拂わなければならない。この展觀の方は地味で宣傳をしなかつたせいも、一般には餘り入場者がなかつたようであるが、各時代の代表的なものを傳本の多少にかゝわらずうまく排列してあつた點、啓蒙的役割は少くなかつたと思ふ。

朝鮮疾病史 (四)

高宗四十三年丙辰（一二五六）是歲、『冬雪無ク、飢疫相仍リ、什屍路ヲ蔽ヒ、銀一斤ハ米二斛ニ直ス』。
 元宗三年壬戌（一二六三）十月、『京城大疫』。十二月、『京城大疫』。

忠烈王七年辛巳（一二八一）六月、『諸軍一岐ヨリ能古島・志賀島ニ到ル。時ニ軍中大疫アリ死者凡ソ三千餘人』。是歲、『春ヨリ冬ニ至リ、中外疫癘大イニ興リ（十一月最モ甚ダシ）、死者甚ダ多シ』。

忠穆王四年戊子（一二四八）四月、『京城大イニ飢疫シ、道饑相望ム』。

恭愍王十五年丙午（一二六五）五月、『比來、水旱ヲ招キ癘疫息マズ』。

恭愍王二十三年甲寅（一二七四）三月、『京城大疫』。

恭讓王三年辛未（一三九一）九月、『許應等上疏シテ、今年水旱霜雹ノ災飢饉疾疫ノ患並ビ起リ又タ貢馬萬匹ノ命アリテ中外騷然タリ、依ツテ工役ヲ止メシコトヲ請フ』。

第一項 主なる疫病

疫病に關しては、『前章の三國時代及び新羅一統期の疫病』に於て、その概念などを述べて置いた。疫病はあらゆる悪性の流行性傳染病を包含してゐるのであるが、右に列記した年紀の疫病に於ては、「高麗史」は史書である性質上、醫學に關する記述は粗略であり、また疫病に對する當時の醫學的知識の未發達に依つて、單に「疫」を以て片附け、それ以上の病名の記載はなく、従つてその疫病は何病に當るかを明かにすることは出来ない。併して考慮し得られるのは、これらの疫病は相當廣く且つ悪性の猖獗を極めたものを主として擧げたのであるから、恐らくチフス様疾患（就中發疹チフス）流行性感冒・痘瘡の類を指し、小範圍で比較的輕症のものは度外視され疫病中に入れられなかつたと云ふことである。而して又、中央集權時代の事情として、これらの疫は主として京城（開城を指す）を中心としたものの記録になり勝ちである。依つて疫史の知見に

正鵠を求めようとするならば慎重でなければならぬ。

次にこの項を補ふ意味で、「郷藥救急方」(前掲)中に述べられてゐるもので、現代の流行性傳染病に當るものを二三拾ひ、一言考察を加へて置く(李朝疾病史流行性傳染病の各項を参照のこと)。

(一) 纏喉風・馬喉痺

「郷藥救急方」喉痺痺者腫痛之言也の條に、「纏喉風、喉閉、飲食不通、欲死、喉閉、遂巡不救、人喉痺、卒不語、馬喉痺、不見處者、爲馬喉痺、喉中深腫、連腭壯熱、吐氣數者、爲馬喉痺、」と見えてゐる。これらには、悪性の急性扁桃腺炎の類も含まれてゐるが、纏喉風乃至馬喉痺は、今日の咽喉デフテリアに當るものと認められる。然し當時では傳染病即ち疫と見做されるまでに至つてゐない。

(二) 痢 疾

「郷藥救急方」には痢を分つて、「冷痢、色青者、熱痢、赤黃者、氣痢、下白如鼻涕而腹絞痛氣塞難下者」となし、更に「冷熱血痢、氣痢、下白膿日夜數十行全不進食」なるものをも載せてゐる。又、「御醫撮要方」(藥集成方)には赤痢腹痛不可忍の症、「郷藥惠民方」(同上)には赤痢の症、「郷藥古方」(同上)及び「三和子方」(同上)には赤白痢の症、に對する治療法が見られる。而して下痢に對しては、上世から説くところは表在する症候の差異によつて各個に症名を附したまでで、單純な腸炎性下痢から各種各様の下痢疾患即ち今日の傳染性赤痢をも含んでゐるのである。よつて上記の痢の中、就中冷熱血痢、氣痢とあるは現今の赤痢に近いものと推察される。明宗王の死因となつた痢疾(高麗史節要卷十四所載)なるものも、赤痢に當ると思はれる。半島では痢疾なる病名を以て一般に赤痢に比定し得るのである。

併しながら高麗時代下つて李朝に於ても、現代の赤痢に對するような限定された知識を持たなかつたことは言ふまでもなく、傳染性をも明らかに認め得なかつた。赤痢は、一括下痢症の中に含まれつゝ廣く存在してゐたのである。

(三) 時 氣 病

小兒時氣病と云ふ言葉が「郷藥救急方」の小兒の部に見られる。時氣病とは、「病源候論」に「時氣病者、此皆因歲時不和、溫涼失節、人感乖戾之氣、而生病者、多相染易」と説き流行性傳染病を指してゐる。小兒時氣病は小兒に多發する流行性傳染病の謂であるが、何如なる傳染病を指すか詳かにし得ない。

(四) 豌 豆 瘡

右と同じく小兒の部に「小兒豌豆瘡、欲發及已發而陷伏者、皆宜速療」とある。豌豆瘡とは痘瘡のことである、痘瘡は半島に於ても上世から存在してゐたのであるが、この病名が明らかに半島に見られるのは、この「郷藥救急方」を以て嚆矢とするやうである。因に豌豆瘡の名は「病源候論」・「千金方」及び「外臺祕要方」に見られる所で、「病源」には「其瘡、形如豌豆、故名豌豆瘡」と云ふてゐる。

(五) 溫 疫

李朝に入つては瘟疫の名はチフス様疾患群に相當するのであるが、高麗に於けるこの瘟疫（瘟疫）は更に漠然としたもので、李朝の瘟疫と同一視されるまでに至つてゐない。よつて「高麗史」肅宗紀（上掲）に見える瘟疫は、一般疫病の中で高熱を主徴とする疫なる範圍（無形の傳染病）以上に出ないものと解さるべきであらう。

雜報 2

總會議事

第十四回日本醫學會の第一分科會として昭和三十年度の日本醫史學會總會は、四月三・四、兩日京都東山の京都女子大學で開催された。二日間に亘る總會は本會としては始めてあり、地元の關西支部役員、特に準備委員の大矢・中野・三木・阿知波四理事の配慮によつて盛會裡に開くことが出来た。二日目の午後、總會議事を内山會長議長の下に協議、今年度の事業、役員推舉等を協議した。

役員推舉

總會議事に際し、新たに評議員として左の二氏を推舉、満場一致で新評議員を委嘱した。

渡邊幸三 池坊短期大學教授・武田藥品

工業株式會社研究所囑託

矢數道明 東亞醫學協會理事・東京醫科

大學藥理學教室

なお、昨年ローマで開かれた國際醫史學會議に本會代表として渡歐された東大の小川鼎三教授は、その會議の役員會に於て新しく委嘱された四名の常任委員の一人として推舉された。わが醫史學界のため、國際的連絡の出來た事は大きな喜びである。

ソ連醫史學者來朝

去る八月、モスクワのソ連科學アカデミー醫史學研究所長ベドロフ博士が來朝、わが國の科學史・醫史學者との意見交換を希望したので本會から内山理事長と小川理事が品川のプリンスホテルで會見、隔意のない談話が交わされ將來の連絡を約した。ソ連では醫史學は非常に重視されており、各國の文獻を集めているが、日本のものは極度に少いとのこと、當方からは學士院編の明治前日本醫史既刊分、本會々誌その他を寄贈した。(石原記)

雜歌

まちかしと 見えぬるまゝに とひくれど なほほど遠き 闇のともしび
燈

ふみを見る まどの燈火 かゝけても ひかりなき身は たゞ更けにける

おこたりの 窓中灯 ともし火の かげさへ暗く 更けにけるかな
學びの窓は

今朝見れば 朝野望 おもひも暗るゝ 野べの色を 夕べは憂しと 何ながめけん

とし波も 流 水 ならはぬものか 夜晝を 知らぬ水だに よどはありけり

恨みつる 曉 鶏 聲 折もありしを あけのねの 寢覺の友と いつなりにけん

雲居には たづも舞ふらし 水清き 葦邊にかめは 浮ひ出にけり

龜みづにうかぶ葦おふるかた

朝松

いつはあれど おく露ながら 日かけさす あしたぞ松の 色はえならぬ

翠松廻家

うらやまし 松を千とせの 友垣に うゑて浮世を 他所の隠れ家

澗庭古松

うしとこそ いはねの松や 世を避けて み谷がくれに としをふるらん

峯松

飛弾たくみ 見すつるふしも ありてこそ 峯には残れ 千代の老松

孤松

草深き 荒野の末に 年を経て 何をか松の ひとり立つらん

松影

ゑがきても およばざりけり 風ながら うつせる窓の 月の松が枝

山寺鐘

山深み 雲はとぎせど 鐘の音は のりの光と ともにさやけし

(夜更鐘)
 はかなさを 見果てぬ夢に かす添へて 更くる夜告ぐる 鐘の音かな

閑居

のがれてき 住めども人の かくまでに うとかれとしは 思はざりしを

山家友

わが友は よにしら雲を へだてたる 峯の松風 谷の下水

山家夢

うつゝにも ふむよしやなき 里遠く へだつる山の 夢の通ひ路

(待人)

なには川 梅咲く頃に なりもせば 打つれだちて はや來ませ君

(尋故郷)

尋ね來し そのふるさとは 荒果てゝ 淺茅がもとに つばめ迷へる

天保十三年八月中旬、ふるさとにいます家尊のおもき病にわたらせたまふと聞き、おどろき歸りしに、
 やゝおこたらせたまへるに、よろこびつゝ月を、見るとて、

うれしくも 見る月影は 故郷の ふるきむかしに かはらざりけり

(送歸郷人)

ふるさとに 歸らば人に 飾れかし 君がこゝろに 被たるにしきを

人の東に下るに

武藏野や 西に月見む 折々に おもひも出でよ なにはづの秋

(旅)

暮近く 日かげはなりぬ 末遠き 道の行手を いかにかもせん

(山路)

越えぬべき 峯近からし 谷水も あるかなきかに 音のなりぬる

旅行友

おもほえず うれしきものは 草枕 結びそへたる 旅の友がき

旅宿夢

日にそへて ほどとほざかる ふるさとの 夢路ばかりや 近くなるらん

岡篠

いく袖か 露分けぬらん 旅人の 絶えぬ行來の 岡のさゝはら

舟中見島

見えそめて まつもこころの 友綱を つなぐは沖つ 嶋根なりけり

(送別)

なには江の ほりえの水の 別れても あふとはしれど 惜しき今日哉

山鳴ぬしの備中に歸るを送りて
 暫時とて とむる袂に こころなく 吹きても行くか 野べの秋かぜ

肥の國へ歸る人をおくりて

別れては あふをいつとも しらぬひの もゆるおもひの 今宵とをしれ

つくぐと 筑紫思へば をしむにも ましてまつらの 人やあるらん

竹風如雨

かぜそよぐ 竹の下みち 夜ゆけば そらにしられぬ 雨ぞ聞ゆる

(祝)

君が代は 限りも果も なかりけり いははの昔は むしもむさずも

和歌の浦に 群れるて鶴の 遊ぶなり 君がちとせの かげに鳴きつゝ

松契多春

日にそへて 茂る松葉を あり數に 君が八千代の 春を數へむ

寄 葦 祝

數ふとも 君が千とせは つくま江の 葦の葉ごとを あり數にして

たぐへみん 君が千とせを ながらえの 葦の葉ごとに 數へ盡して

人の還曆に

とし曆 巻きかへしつゝ 老松の いく十かへりの 花か見るらん

佐川ぬしの八十の賀に

いく八十瀬 こえつゝたつか しら波の 寄るとも君が 年は盡せじ

(伊勢人の八十賀に)

すゞか川 八十瀬わたりて たひらけく 千とせの坂も 君ぞこえなん

(五十になりし年に)

大方の 人におとらで 事もなく 五十路の春を 迎へつるかな

（老身送年）
ことはみな 若きにゆづる 老が身を 年の急ぎは のがれざりけり

（老翁）

老の波 寄る眞鶴の いくちゞの まご子か見つゝ おもひかくらむ

うらわかき よは夢なりき あすよりの 老をばながく うつゝにぞ見む

（折にふれて）

きのふまで 音もさむけき うら波の 今を春べと すゞむ難波津

杖

身に受けし 昔にかへて 苦しきは うたれぬ今の たらちねの杖

述懐

筑波山 はやましげ山 わけもせで 高ねにのぼる 人ごゝろかな

種痘

世の人の 敷はますく ます鏡 むかふにはづる おもひなくして

緒方洪庵歌集

うゑもがさを物名にして

年毎に おひそふ野邊の 小松原 千代に繁れと うゑもかさねむ

公の召を蒙りてあづまに下るとて旅たちける時によめる

よるべぞと おもひしものを 難波潟 あしのかりねと なりにけるかな

青木周弼におくれる書の中に(文久三年)

ひだたくみ みまつるふしも あらばこそ 嶺には残れ 千代の老松

述懐 涙

ますらをが 袖にせきあへぬ たきつせは 何にこぼるゝ なみだなるらむ

鐘 鐘

なるとだに 知らざれりつる曉の 鐘も友とは いつなりにけん

夕 幽 思

入相の 鐘のかすかす かぞへても つきぬおもひに けふも替れにき

世路如夢

空蟬の よはよしあしも みながらに なにはの春の 夢にぞありける

(夢 現)

はかなさの 夢は三年に なりてしも 猶うつゝとは おもはざりけり

夢

今はたゞ 夢ぞたのみと なりにける うつゝに見べき 君にあらねば

有馬うしのゆくりなくうせ給ひしを惜みて

いとどなほ 光やそへむ 夕顔の 花にやどれる 露も消えすば

師の十三回忌によめる

今更に なげくも何の 甲斐の駒 こゝろざしてぞ 逐てはせなめ

坂本周鼎が三回忌にあたりて夜よめる

たちばなの かをりに昔 偲ばれて 袖さみだるゝ 今宵かなしも

丸茂政貴が追善會に春旅といふ題を

かへりみる 家路のみかは むかしさえ たちへだてたる 霞かなしも

涙 砂

よるべきへ なぐさのはまの 眞砂だも 千々のなげきぞ 數へ盡さじ

(馬)

武藏あふみ さしていさめる 駒にだに なり見てしがな ともに行くべく

大中信宣朝臣

童子だに その名は知りぬ 御垣もり 衛士のたく火の よゝにひかりて

王 昭 君

うらむなよ 繪のいつはりに よりてこそ よにうつくしき 名も残りけれ

袈裟御前

露と身の 消えずばいかで ますらをが のりの道芝 踏みは分くべき

西行上人六百五十年回忌に寄花懷舊ということを

しのばるゝ そのきさらぎの おもかげも 見えてはかなく 散るさくらかな

歌 文

梅たづねむとて人のもとに

春もはや如月ちかうなり侍るに、よも山の雪はきえやらす、庭のやり水もこほりとぢて、かぜいと寒う吹きわたるに、きのふまではさながら冬のこゝちして、たれこめ侍りぬれど、けふはめづらしう日うらゝかにして、空長閑く野も山もかすみこめたり。

梅の花 今ぞさくらし いざたづね見む

みこゝろもおはさば、御ともし侍りなん。たゞはやうおぼしたちたまはんことをこそ、こひねがひたてまつれ。あなかしこ。

野 月

むしのなく音に誘はれて、夕暮がたより野邊とほくさまよひ出たるに、ひがしの山のは晴て月かけ高うさしのぼり、百くさの色ひるよりもあかう見えわたり、うちまねく尾花の風 そよと身にしみ、萩の花におく露はたをらねど、玉ちるさまなど家に居て見るとはことさらにして、

ふみわけて 小野のほそみち 月きよみ うきよのほかの 秋を見るかな

とくちすさみたる折しも、雲るはるかに雁の啼わたりたるいとあはれにをかし。

月きよき 小野のはそみち たどり來て 秋をうきよの ほかに見るかな

秋の舟行といふことを

八月十五日、夕日も山のは近うなりたるころ、友どちみたりよたりうちむれとよめき來て、わりごさどえなどおのがじし持ち提げ、いざたまへ、今より舟を清き川瀬にうかべてこよひの月見んとそそのかすにぞ、やよ、おのれもと例のひさごたづさへ、やがて流にさし出たり。暮行くま、薄ざりたちてそこはかとなく見えがたうなり、大城にかへる夕鴉、御寺にひびく入相のかねは、秋のあはれを告げわたり、ふきそよぐ河風のよせ來るさど波は、さびしくも身にしみて何となうこころぼそくおぼゆれば、

いつ見ても かはらぬ水の いろもなど 秋のゆふべは かなしかるらん

などすんじ、身のうちみな打しをれて袖ぬらさぬはなかりけり。しばしがほどに、やよ殿たち月は出たるぞ、いかに見たまはずやと、舟人のいへるにおどろきてふりかへれば、見わたすかぎりはや氣色うちかはりて夢のさめたるこゝちし侍りぬ。

秋のもなかは、よど川に舟さしてものせしが、今宵はいかにせむと友どちひたりよたり、うちつれたち、夕暮がたよりさまよひ出て、まづ、有賀の君の草庵にたちよりぬ。あるじの君はやくもたちいで、よくこそ來ませ、けふしは家に居てこそと、むしろまうけまちゐたるなり、いざこなたへと誘はれたり。まことや市のうちとはことかはり、ものしづかにして虫の音あはれにをかしう聞え、露ふかうして月かげいとさやかにすみわたり、まがきの菊は天つ星かとあやまつべうさきて、花の香のあやしくほのかににほひたる、さながら僊境もかくやとおもはれて、さきに淀川に見たるとは殊更めでたくうちおばえ侍りぬ。

かゝりとは よにしら菊の 香ににほふ やどにこよひの 月を見るかな

長月の こよひやきくの しら露に 月も千とせの かげやどすらん

秋人事といへることを

御寺くの彼岸の會にまうづるとて、町のうちは老たるもいとけなきも打むれて、ところせきまで西に東に行かひぬ。かしらに霜をいたゞきて、手に念珠つまぐり、佛の御名となへつゝ、殊勝げにたどるもあれば、かほかたちうるはしうみやびによそはひて、なまめきわたり、われ顔に心にくう歩むもあるなどをかしけれど、いとさうぐし。家つゞきはなれたる野路にいづれば、わせかるをのこ綿つむ少女子がうたひつれたる賤がわざの、秋はわきて暇なきさまみじうあはれにぞ見えける。日も暮ぬれば、

そこらに咲みだれたるもくさの花わけて虫撰みもし、月も見まほしけれど、夕やみの どのせむすべ
なからんと思ひはかられ、いざ歸らんとて、

ものいはぬ 色いかにせむ 女郎花 野べにねまぢの 月も見ましを
と、たはむれしに、かたへなる人の

色に出て まつもひさしき 女郎花 とはぬをなにと 人にこたへむ
とかへしたるに、笑ひてわかれぬ。

時雨のふりける日、翁のもとに

けふといへば、はや空も冬めきわたり、風のあわたしう吹きて、時雨のあらううちそくぐは、いと
かなしげにおぼえ侍るにぞ、

露けきは けさぬぎかへし 袖にまた おりしりがほの うきしぐれかな

とくちすさみ侍りき。まいてとし高うわたらせたまう御身には、殊更ものうくこそおぼすらめ。か
る折から、たれこめるてはやるせなう侍るものから、しぐれのひまの どにまゐりて、ふるき御ものが
たりもきかまほしう思ひたまふるなり。されど、暇のひまのあらせたまはぬも、はかりがたうて、まづ

使もて聞えあぐるになむ。御いらへをこそまち侍れ。あなかしこ。

神無月ついたちの日に

をがたの あきら

翁の君の御もとに

もみぢ狩せむとて人のもとへ

此ごろは、空さだめなうなりて、折にはしぐれの軒におとづれ侍るにぞ。峯のかへで麓のはごろもぞめいでにけん。おもひたまふるものから、

み山べは もみぢしぬらし むら時雨 ふり行あとを いざやとはなむ

とはんとの御心もはべらば、かつちる山の錦、ひと目もはやうおぼしたんことをこそ待ち侍れ。

あなかしこ

故郷道

秋の日もかたぶきて、夕暮ちかくなるまゝ、いづくも同じさびしさに、柴の戸をたちいづれば、風に浪よる尾花が末は招くかとうたがはれ雲に橋かくる雁がねは、よぶかときかれて、あゆむともなくいつしか野べとほくたどり來にけり。西にながめ、東にかへり見するに、二まちばかりべだてつらんほど

に、老木しげりて草むらふかき岡の見ゆれば、あれなんいづこにかと、道行人にとふに、昔やんごとなき君のさすらへて年ひさしく住みたまへるところなりしが、あれにあって今は狐たぬきなどいふけものすみ家となりはてぬ、と答へける。かなたに高き松が枝は秋の夜の月をめさせ給ひつらん高殿のなごりと見え、こなたにしげるむら竹は、冬の朝の雪を興ぜさせ給ひけむ窓のわたりと思ひはかられて、いとしたはるれども、行きて見んには道もなし。

しのばるゝ　むかしを何に　ふみわけん　おもかげのみの　里のかよひぢ

落葉といへる題にて

庭のうちはみな冬となりはてたるに、いかで秋の名残をたづねばやと、友うち群れて時雨の風のあら／＼しきもいとはず、山路ふかうさし入りぬ。谷川づたひ行まゝに、風のかけたるしがらみも、半は色うつり行く霜をたてなる錦は残りすくなうちりうせて、松の木のまの蔦もみちのみ我はがほにまとへるいとあはれにをかしけれど、落葉に道のうづもれて、おぼつかなうたどらるゝは、花にわけ來し春とは物かはりて、かなしうこそ。

さびしくも　山はなりけり　ぬれてほす　袖に落葉の　うちしぐれつゝ

秋のほどは、田かり綿つみことしげう侍りて、久しうおとづれも聞えあげず、いとなめしうおぼすらめ。これもよわたる事のつみに侍れば、ゆるしたまへかし。此頃は、麥の種まきはて、春の若菜の苗さへをはりて、

みのりよき 秋をくり來し 賤が屋の うきも忘れて うづみ火のもと

ひるも枕してものがたり文などよみつつ、もすのさへづり、鴨の羽がきあはれにをかしう、きくもたのしう侍れど、ものがたらはん友なきをいかにせむ。ひなのわびすみ見ぐるしきも、いとひたまはずば、牛にてもくらおきまるらすになむ、うちのりてきたりまさは、こよなきさちにこそ。あなかしこ。

神無月とをかあまり一日

綱代といへる題にて人につかはす文

此ほどは、おとづれも聞えあげず、何事かおはしますらん。この氷魚は、よんべ、やつがれみづからあじろに物して、とりえたるにぞ侍るなる。海のさち河のさちにあきたまへる御身は、かばかりのものいかにとおぼすらめど、冬山ざと何まゐらせんものも侍らず、よもすがら風もいとほで、氷の床まもりあかせしその心ばへのみもおしはかりてうけさせたまはらば、こよなう、嬉しきことになむ。

かげさえて 波にあみせる 川づらの 月もやどせし ひをとこそしれ

神無月はつかあまり一日

あなかしこ。

待雪といへる題にて

久しうま見え侍らでなつかしう思ひたまふるものから、きたり給はむことこひねがはしけれど、園の
 殘菊も霜がれてきたなうなり、軒の紅葉も風にしぐれてちりつくし、庭は木葉にうづもれて、ふみわけ
 まさん道さへなきをいかにせむ。いとはやも雪のふりて、見ぐるしきをつみかくさばと、あけ暮たのみ
 侍れど、

しぐれののみ まつにかひなく 音づれて 雪はふり來ん 色もなきかな

ただあこがるる心のくるしきもおしはかりたまはらば、こよなう嬉しきことになむ。 かしこ。

神無月つごもりの日

霰といへる題にて

冬の風いとあらう吹きて、大空俄に、おどろおどろしうかきくもり、霰のよこさまにはげしう降りみ
 だるるに、板屋の軒もやぶれつべうみぎりの石もくだけちるかと思え、ここにほとばしり、かしこにと
 びかふさま、さながら恐しきやうにこそ、おぼえらるれ。されど雨のかなしうしたたりて、ものおもひ
 がちに、雪のしめやかに積りて、ここちさびしきには、はるかにまさりてめざましうここちよし。

降るままに 晴れぬ思ひの かなしきも 憂さもくだけで 散るあられかな

冬の日の寒さにたれこめたる折しも、柴の戸におとづるる者あり。誰そと聞けば、里の何がしより今宵里神樂し侍るに來て見たまはずやとの使なり。やがて、それと伴ひいづれば、日もはや山のはに入て野邊の夕かぜ寒う身にしみ、手も足もつめたうこごえつつ、心ぼそう行くままに、烏羽玉のやみと暮れはてたり。まだ道のほど遠きやと尋ねれば、あれなる森に火の見えたるに侍る、といふに力えて、やうやうそこにたどりいたりぬ。神の御まへのともし火の數多きは天つ星かとあやまたれ、庭のかがりの火のあかさは、ひるよりもまさりておぼえられ、笛のねつづみの音うちまじへ、賤の少女子が白からぬ顔に、こくよそほひて舞ひ、あらをのこが、だみたる聲を高うあげてうたふさまなど、ひなびたれど興ありてこよなうおもしろく、いと長き夜のふくるもわすれ、霜寒き曉のすぐるもしらざりしこそをかしけれ。

そのかみも　かくや天の戸　あけてしも　あかぬかぐらの　おもしろきかな

いとけなき人に

ぬしはいとけなうおはしながら、ものかきふみよみ何まれすぐれて、年たけたる人もおよば　ほどによくものしたまふこと、末たのもしうこそ思ひたまふれ。さることには侍れど、人よりほめらるれば、おのづからおこたりのいでくるものにて、おのれもいつのまにか、むなしうよそぢの年月もこえ侍りて

今更悔しう侍ることのみおほかる。ぬしはこともなからめど、いかでふかくつつしみて、おこたりなくおひたち給はんことをぞ、こひねがひ侍るかし。

さかえ老 行くとし波の はやき瀬は こころしてこそ 君わたりこそ

羈旅といへる題にて

鳥の聲に夢さまされ、馬のいななきにうち誘われて、朝まだきにうまやをたちいでたるに、さながら心地すずやかにして、よきものにあれと行くままに、身もつかれ、足もいとうなりて、行きかふ人は見しらぬに、物いひかたらはむよしもなく、道のやちまたは、とひ尋ねねば、ふみわけむすべもなきは、心ぼそうして、いとかなしうくるし。まいて雨の夕暮やどりもとめかねたるに、鴉のなくも、ねぐらに歸るときけば、うらやまれ、雪のゆくも、風にまよふと見れば、かこたれて、そぞろに袖のぬるが上にぬるるは、何といはんかたぞなき。されど、いひも、けにもるてふことなく、枕も草むすぶてふことなく、いづくの國のはてまでも、やすらかに旅せらるるは、動きなうをさまれる御代にうまれ來つるさちにこそあれ。嬉しうあふがざらめやは。

さかえ行く 御代のめぐみや 草まくら しひの葉にもる いひはなきまで

露は川にながれ、泉にわくも、おなじ水にしあれど、かたちやさしうこりて、すがた清らかにむすぶものから、その時そのおもむきによりて、たのしうも悲しうも人の心を動かし、あるは、あふぎたふとまるるものにありける。春の曙の山の端しろく咲る櫻には、そのあだにうるはしきさまをそへて、たけきもののふの心をもやはらぐべう見え、夏の夕ひかげ池水すすしううかべるはちす葉には、濁りにしまぬ清けさを、ましてあつさにあへぐ賤のをが身の苦しきも忘るべう思はれて、たのしう心地よきものなれど、秋の野の千くさの末にむすびて、朝日影に、はかなうきえうせ、夕の風にもろくなり、ものおもふ人の袖ぬらすは、さながらたぐひなうあはれにかなしきものにこそ。れど、家居つくるみ山木も玉の緒つなぐあは米も、みなかの露のめぐみをたのみてこそ、おひもし、そだちもするものなれ。又いはんかたなく、たふときものにあらずや。

ゆたかなる 秋のみのりの 色見えて たのものの稻葉 露所せき

友を悼みて

富子思成ぬしは、年頃久しう友とし語らひて、かたみに親しうむつびしに、ことし文月末つ方よりやまふの床にふし給ひ、たれかれと名あるくすしも多くよびつどへ、神に佛に祈りちかひ、くさぐさに手をつくし心をつくして、ものし給ひつれど、そのしるしもなくて、長月の五日といふ日の夕風に、あだし野の露と消えうせ給ひけるは、いと悲しう口をしきことになん。やつがれも、匙とりて薬まゐらせた

ることども思ひつづけて、

ともしなば　かくはあらじと　くりかへす　かひもなみだに　ぬるる袖かな
 菊にこそ　ちぎらめものを　花のうへの　露にはいかで　たぐひまどへる

緒方洪庵歌集

終



武田薬品

内服で大量に吸収される

新型V.B₁剤



アリナミンはビタミンB₁とニンニクとの協力作用の研究によつて発見された世界で初めての新型V.B₁剤で、従来のB₁剤では不可能なB₁の内服による大量投与が可能になつた他次の様な種々の優れた特長がある。

【特長】 ①内服により腸管から速やかに大量に吸収される。 ②体内で速やかにB₁となつて作用し、臓器中に長く貯蔵される。 ③アノイリナーゼ(B₁分解酵素)の影響を受けない。 ④親和性が強く利用率が高い。

〔効能〕 ★食欲不振、V.B₁欠乏による栄養障害、肺結核・喘息その他消耗性疾患の補助療法 甲状腺機能亢進、糖尿病、急・慢性湿疹、疲労回復、脚気及び脚気様症状 ★神経痛、神経炎 リウマチ、神経手術後の神経麻痺・知覚障害 手術後の神経障害、末梢神経麻痺、坐骨神経痛 顔面神経麻痺、多発性神経炎、中心性網膜炎 視神経炎、眼筋麻痺、関節リウマチ。

チオール型V.B₁誘導体制剤 (T.P.D.)

アリナミン

〔包装〕 糖衣錠 (1錠中=5mg) 30錠・100錠

大阪市東区道修町 武田薬品工業株式会社 (東京・札幌・福岡)

(ア26)

信頼される

ドイツ



バイエル医薬品

初老期の循環障害に

循環系ホルモン剤

カリクレイン

(注) 10単位5管 ¥840 (錠) 10単位 20錠 ¥980

重篤症には【新発売】デボ・カリクレイン

(注) 40単位 5バイアル ¥1,800

高血圧・動脈硬化に…注射用有機ヨード剤

エンドヨーン

(注) 2cc 10管 ¥820

強壯・砒素療法に

ソラルソン

(注) 1cc 12管 ¥480

特に神経強壯に…

オプタルソン

(注) 1cc 12管 ¥490

抗菌スペクトルの広汎な…

内服用

スプロナール

(末) 25g ¥1,240 ; 500g ¥21,900

局所用

マルバダール

(末) 10g(滅菌瓶入) ¥700

強力肝臓エキス療法に

ナグラボン

(注) 2cc 5管 ¥300

喀血その他の止血に

マネトール

(注) 1cc 5管 ¥700

疲労回復・強壯に

ユベニン

(注) 1cc 10管 ¥650 (錠) 50錠 ¥800

バイエル製品の御照会は吉富製薬バイエル薬品部へ

製造 ドイツ・バイエル染料薬品株式会社薬品部

ドイツ・レバークーゼン

輸入元 吉富製薬株式会社 販売元 武田薬品工業株式会社

大阪市東区道修町二丁目二六

(A37)